研究ノート

ウェズレー・C・ミッチェルの貨幣の役割についての分析

齋　藤　宏　之

概　要

W. C. ミッチェルの「経済史における貨幣の役割」および『景気循環――問題とその設定――』の第二章第一節第三項「企業経済の進化」に依拠して，貨幣経済の長期的変化は，広範にわたる説明変数が累積的に作用することにより，複合的結果が生み出される点を解明した．貨幣の使用が先入観に及ぼした影響を詳らかにし，金銭的思考習慣の発展に至った過程が明確になった．貨幣制度の高度な組織化，文化的意義，役割，および変化過程を考慮すると，合理性が特徴づける抽象的な人間性を措定する伝統的な経済思想が，特定の制度の論理に支配されていると批判することにつながっており，同時に貨幣使用をめぐって作り上げられた制度の複合体を枢軸として，経済学の統合を試みるに至ったことを提示した．

キーワード：貨幣制度，金銭的思考習慣，累積的変化

I　ミッチェルと制度主義

ウェズレー・C・ミッチェル（Wesley Clair Mitchell）は，経済行動の様相，とりわけ貨幣経済の性質に深い関心を寄せ，ソースタイン・B・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen）の制度主義を実証的に展開した．

ミッチェルが貨幣経済を重視したのは，貨幣の使用が合理的体系を提供するがゆえに，経済行動は合理的であると捉えていたからである．但し，合理性は後天的習性であり，決して堅固な土台ではないと理解することが前提であるとしている．そうして初めて，経済理論の礎を見いだすことができるのではないかと考えたのである．

しかしながら，正統派経済理論の類型は，経済行動それ自体が常に合理的であると捉えているため，仮説上あるいは想像上の個人に基づく行動の理論を足掛かりにしているにすぎないと指摘した．人間行動の観察を疎かにすれば，快楽・苦痛の心理学に依存することとなり，現実の人間行動を説明することはできなくなる．その結果，「社会科学者は，想像のなかで単純化された条件を設定し，非現実的な世界であれば何が起こるかについて結論を導出するのが習慣となっている．その結論とは，現実の経験に訴えることによって誤りを証明できないものである[1)]」と述べていることからも分かるように，時空の現実に合わない抽象的なタイプの経済理論になったといわざるを得ないとみているのである．

ミッチェルの見解によれば，人間は，自らの理性を働かせる独立した合理的創造物ではないがゆえに，自らを取り囲んでいる価値・制度体制によって影響を受けてしまうものである．制度は，個人行動を導く際に強力な作因となるため，その個人行動を適切に説明することが不可欠であり，それにはまず制度的観点から考えなければならない．経済行動は，それ自体が埋め込まれている制度に基づいて説明しなければならない．これらを念頭に置き，経済行動を累積的かつ量的に分析するた

1) Wesley C. Mitchell, “Facts and Values in Economics,” *The Journal of Philosophy,* Vol. 41, No. 8, April, 1944, p. 217.

めに，換言すれば，観察を重視し思弁を排除するために，自然科学の方法に則ったうえで，経済的実態に関する膨大な経験的データを蒐集した．そうして，経済データを量的あるいは統計的に処理する方法を広く利用したのである．

したがって，貨幣経済が拡大していく途上においても，広範な経済情報を必要とする段階に達したとき，一連のデータの蒐集により，説明仮説を幅広く検証することが可能となった．ミッチェルは，こうした経験的検証を考慮して，自らの仮説を明確に系統立てて説くことを試みた．

実際，彼の思想史的志向性は，量的であると同時に制度的でもあったといえる．思想体系に鑑みれば，その量的方法論と自身の制度重視の見解とは，密接に結びついていることが看取される．それゆえ正統派経済学に対立して，実証主義的土台が経済理論の基礎条件において，いかに重要であるかを主張した．

こうしてミッチェルは，高度に組織化された貨幣制度が，文化的にいかなる意義を有しているか考察し，現代文明において貨幣が演ずる役割を説明した．文化現象として制度を重視し，貨幣制度に起因する累積的変化の多様性・相互関連性を考慮しつつ，要するに，金銭制度の進化をめぐる意識的習慣の分析を通して経済理論の枠組みを構築しつつ，制度理解の可能性に言及した．

ヨーゼフ・アーロイス・シュムペーター（Joseph Alois Schumpeter）が，「経済社会学は，社会制度すなわち世間一般の社会習慣を分析するのだが，その経済社会学と呼ぶのが最も相応しい分野を含めるために，ミッチェルは経済学の最先端を拡大しようとしたのであろう[2]」と述べているのは，けだし至言である．

そこで本稿では，上述のミッチェルの制度主義の本質に接近すべく，制度の複合体である文化を重視しつつ，貨幣の使用が先入観に及ぼす影響をめぐって，貨幣経済の長期的変化過程をどのように彼が論じていたのか，つまり貨幣様式が，人間関係に浸透してきた過程や習慣に及ぼす影響をいかに考察していたのかを検討していくこととする．

Ⅱ　経済史における貨幣の役割

ミッチェルは，自身の論文「経済史における貨幣の役割[3]」において，社会組織や個人行動が進化していくうえで，貨幣が演じてきた役割は詳らかになっていないと述べている．「人間が使用してきた様々な形態の貨幣，貨幣制度の進化，贈与物・海賊行為と通常取引・組織的市場の台頭との関連，現物税・用役の金納への変化，小作農階級から賃金労働者への変換，戦争の時代や平和な時代における政府財政の方法の変化，信用・銀行業の発展，簿記の普及とその会計学への洗練，様々な形態の営利企業，物作りと金儲けとの関連[4]」をめぐる研究論文についても，これらは閃光ではあるが，全体を持続的に照らす光ではないと捉えている．それゆえ，貨幣様式に関する首尾一貫した説明が不可欠であると考えるに至った．そして貨幣の使用が，人々の生活にいかにして浸透してきたのか，また人々の意識的習慣や思考習慣にいかなる影響を及ぼしてきたのか，その過程全体を明確に描こうと試みたのである．

ミッチェルによれば，貨幣は取引に導入されると，一般化された購買力のおかげで経済的自由が拡大した．従僕も支配者も，より広範な選択権をもつに至った．しかしながら，アダム・スミス

---

2) Joseph A. Schumpeter, *Ten Great Economists: From Marx to Keynes* (London: Routledge, 1997), p. 246. 中山伊知郎，東畑精一監修『十大經濟學者――マルクスからケインズまで――』日本評論新社, 1952 年, 344 ページ．――訳文は邦訳書によったわけではなく，私の自由に訳している．

3) Wesley C. Mitchell, "The Role of Money in Economic History," *The Journal of Economic History,* Supplement, Vol. 4, December, 1944, pp. 61-67.

4) *Ibid.*, p. 61.

（Adam Smith）のいう「明白にして単純な自然的自由の体系」は，貨幣経済における住人にとってのみいえることであり，万人には当てはまらないようにみえるとしている[5]．

経済的自由は，選択する機会を得るという利点ばかりでなく，責任を負わせたり危険をもたらしたりすることもある．貨幣所得を獲得し，それを支出することで生活し，貨幣経済のもつ便益を手に入れる際には，社会が新たに受ける過酷な訓練によって「経済的美徳」を身に付けさせられた．すなわち，より計算高く，自立的に先見の明をもつようにならざるを得なかったのである．

金を儲けることに長けていた個人は，ミッチェルによれば，生活のあらゆる面において指導的地位に立ち，新しい指導者の集団を社会に提供した．「貨幣経済は，支払い能力のある消費者が買いたいと思うものを最も効率的に提供する人々が，財を作るという課業を次第に管理するようになった[6]」からである．但し，「その人々の地位が続くかどうかは，その効率性を維持できるかどうかにかかっている[7]」と指摘した．

貨幣の使用が増加することにより，非人格的な市場原理を通じて，財の生産・分配方法における強制的変化が加速したとミッチェルは捉えている．こうした変化に対して抵抗はみられたものの，貨幣経済は人々に高い動機付けを与えることにつながり，それによって才気縦横の精力的な人が誇りとされる時代が到来した．

その一方で貨幣経済は，国家を貨幣体制の技術的要件に起因する危険にさらしたとミッチェルはいう．国家が学習しなければならなかったのは，様々な呼称の貨幣と様々な金属の貨幣との併発的な流通，通貨の偽造や，金粉を盗るための貨幣の削り取り防止，硬貨用の貴金属の獲得，輸出による流通貨幣の減少防止についての方法であった．その後，様々な種類の紙幣の使用と結びついた技術的問題も浮上した[8]．「……貨幣経済においては，生計それ自体は複雑な生産・分配体制が整然と機能することに依存しており，これは次に価格差益に依存しており，価格は貨幣によって目まぐるしく影響される……．最高の貨幣体制を有している国民ですら，外地からヨーロッパに流入する金銀の供給の変動によって深刻な影響を受けた[9]．」卸売商品価格，賃金率，賃借料の変動によって，戦争遂行努力を妨害されないようにすることは困難である．1944年7月，ニューハンプシャー州で開催されたブレトン・ウッズ会議に対する反応をみても分かるように，合衆国の専門家たちは，貨幣体制を設計する最良の方法について意見が一致していない[10]．

ミッチェルの所説に従えば，現代人の心が貨幣の幻想に取りつかれているという主観的影響には，客観的対応物がある．貨幣経済の生産は，消費者のためになる財に向けられているのではなく，生産者にとって利潤の見込みのある商品に向けられている．そのため所得分配の不平等を招くことになるが，概して金儲けの帯びる非常に技術的な性格のおかげで合理的になる．

さらに，貨幣経済は企業循環の原因でもあるとして，次のように述べている．

「企業循環をたどることができる限りでは，経済活動の拡張と縮小が循環する変化は，主として，財の生産と分配が利潤を求めて経営されている営利企業によって続行され，ほとんどの人々が貨幣所得を得て，それを支出することによって生計を立てる共同社会においてしか起こらない[11]．」

ミッチェルは，貨幣の使用が経済努力を導くための合理的体系を提供することによって，経済理論への道が開かれると考えた．なぜなら合理的行為は論理的に熟考し，明確に説明することができ

5) *Ibid.*, p. 62.
6) *Ibid.*, p. 62.
7) *Ibid.*, p. 62.
8) *Ibid.*, p. 63.
9) *Ibid.*, p. 63.
10) *Ibid.*, p. 63.
11) *Ibid.*, p. 64.

るからである．しかし貨幣経済は，行為を合理化するという作業を表面的な意味でしか行っていない．人間行動を軽率に観察すると，貨幣経済が仕掛ける罠に陥ることとなる．経済行動は常に合理的であると捉えてしまい，快楽・苦痛の心的な帳簿をつけると想定することに不条理は見いださない．人間は実際にどのように行動するかの説明ではなく，様々な想像上の状態の下で何を行うことが人々の利益であるかの分析となったとみている[12]．

このようにして魅惑的な思考体系は案出されてきた．「……貨幣経済は，自身のイメージ通りに人間性を作り直すことはなかった．たとえ行動は多くの場合計算に導かれるだけではない理由があっても，利己心を計算高く追求する見地から経済行動を説明することはできない[13]．」経済行動の知識は，図式的，皮相的，技術的である．人間は選択の尺度をもっていると述べさえすれば，論理的には適用される推論の基礎が築かれる．よって，仮定から推論できる結論がもつ，まさにその普遍性ゆえに抽象的な経済理論となった．

貨幣経済は，経済行動を利己心の計算高い追求として，もっともらしい説明をしてきたばかりでなく，より科学的に論ずることを困難にし続けてきた．現実の観察による情報が少ないうえに，その情報を有効に用いる方法も未熟な段階では，仮定から導かれた思弁によってしか経済問題を扱えなかった．しかし拡大していく途上で，データの蒐集が功を奏し説明仮説を検証できるようになった．この経験科学は，貨幣経済の最近の段階の副産物であり，現実の行動の分析的研究に基礎づけることができる．

ミッチェルはこれまで，貨幣制度を取り入れたことで引き起こされた累積的変化がいかに多様であるか，また新情勢の史的進化はいかに相互に関係があるか示唆してきた．過去から修正されつつ未来につながっていく組織である制度の複合体を理解するために，そうした役目を経済理論が果たさなければならないと考えたのである．

それを象徴するかのように，ミッチェルはこう述べている．

「そして社会組織がどのように進化しているか深く理解することは，今や絶対に必要であるので，世界の研究に科学を適用することによって目前に開かれた大きな機会に，これまでよりも意識して大胆に経済組織を再調整しようと努力している[14]．」

しかし一連の膨大な資料を整理して，それぞれが自らの研究論文に盛り込むのは極めて困難なことである．それを踏まえたうえでミッチェルは，その克服に至る道を提示した．金を儲け支出する形で国家の経済活動を系統立てる意識的習慣のおかげで，経済理論に対する基本的枠組みが得られる．それゆえ，経済史は金銭制度の進化をめぐって，最も効果的に系統立てることができる可能性があり，活動の歴史は，その活動が有する明確な組織体系に従う可能性があることを示唆した．

ミッチェルは，この示唆が思慮深い考察に値するなら，それを実際に使ってみようとするための第一歩として，何が必要であるかを述べている．それによれば，人々が金納に基づく取引をどのように整えるようになったのか，そして，その体系の領域がどのようにして次から次へと拡大していったのか，さらには物的・文化的結果として何を導くことができたのか，合理化・非難の根拠とは何を指して喚起しているのか，これから起こる可能性のある変化がどのようなものなのかをめぐって，可能な限り説明をまとめることだという．「そのような略述は，われわれに影響を与えている社会組織の大きな問題を効果的に扱うことに貢献するばかりでなく，経済史の研究計画を立てることやその結果を効果的に提示することにも貢献

12) *Ibid.*, pp. 64-65.
13) *Ibid.*, p. 65.
14) *Ibid.*, p. 66.

する[15]」とミッチェルは考えたのである．

この金納に関する経済分析を簡潔に取りまとめている所説を，ミッチェルの著『景気循環――問題とその設定――』（*Business Cycles: The Problem and Its Setting*）の第二章第一節第三項「企業経済の進化[16]」（The Evolution of Business Economy）に見いだすことができる．

Ⅲ　企業経済の進化

ミッチェルは，当然視されている制度が，いかに複雑な性質を帯びているか解明すべく，貨幣の使用が成長してきた諸段階を丁寧にたどっている．

その第一段階として，「人間が贈与物を交換し，それから財を目的として物々交換し，所有権の概念を進化させ，価値を公分母で表し，特定の商品を通貨として使用し，市場を有し，専門的職業を発展させ，企業としての取引を牛の窃盗・誘拐・町の略奪と一緒にし始めた一連の定かでない時期[17]」を指摘している．そして，より進歩した次の段階を，バビロニアやエジプト，中国やインド，ヨーロッパ，メキシコやペルーで始まる有史時代に見いだした．貨幣鋳造の画期的な発明が，小アジア西部で紀元前700年頃になされたと推定し，フェニキアの商人によって地中海地域にもたらされた点にも注目した．これらの初期段階を経た後，貨幣の使用は，フェニキア，カルタゴ，ギリシャで急速に発展し，ローマでは一層顕著に拡大したと捉えている．企業的社会が，パックスロマーナの下で全盛を極めたのである．

しかしローマ文化が崩壊すると，金銭組織は衰えた．商業の縮小，必需品の交換領域の縮小，市場向けの製造業の消失，貨幣鋳造の混乱，貨幣の使用に替わる人的役務・商品での封建税・荘園税の支払いが確認されるようになった．

一方，例外的にコンスタンティノープルに支配されていた地域での貨幣経済の失墜はなかったとみている．そして十字軍戦士やベネチア人が1204年にコンスタンティノープルを略奪した後，より決定的にはオスマントルコが1453年にコンスタンティノープルを占領した後，商業の主導権はベネチア，アマルフィ，ジェノバなどイタリアの都市に移動した．貨幣経済の力強い発展は，地中海西部と境界線を接する地域で始まり，次第に北部の諸国に広がっていったとしている[18]．

ミッチェルはさらにこう述べる．

「経済が発展する際，先導するのは引き続いてイタリアの諸都市，スペイン，南ドイツ，フランス，北海沿岸低地帯であった．イギリスは18世紀まで後れを取っていたが，そのときロンドンが最大の金融の中心地としてアムステルダムに取って代わった．そしてイギリス人は，オランダ人同様，概して貨幣所得を儲け支出することによって生活し始めた[19]．」

またアングロサクソンの時代においてすら，イギリス国王は，貨幣の使用が効率的な管理方法であることを把握していたとみている．それは，国王が現物課税を金納に替え，種々の税を金で徴収し始めていたからである．

ミッチェルは，金銭組織が次の段階に入ったのは，封建制度の徴募を有給の職業軍人に置き換え始めたときであるという．また国王の荘園では，隷農は労働・商品での税を金に振り替えることが許可された．そうして次第に，町に住む庶民の間でも生活を売買に基づいて再編成する動きが自然発生的に生じた．町は，外国貿易あるいは地域間貿易が行われる中心地でもあった．よって取引量も増大し，貨幣を土台とする組織が徐々に地方にまで広がっていった．農村地域における画期的な

15) *Ibid.*, p. 67.

16) Wesley C. Mitchell, *Business Cycles: The Problem and Its Setting* (New York: National Bureau of Economic Research, Inc., 1927), pp. 66-75.

17) *Ibid.*, p. 66.

18) *Ibid.*, p. 68.

19) *Ibid.*, p. 68.

変化を，週賦役・恩寵賦役・商品支払いの貨幣地代への振替が拡大したことに見いだし[20]，次のように続けた．

「年配者のなかで，金を儲け金に依存して生活するという新しい要領を身に付けられなかった人々は，土地に縛られた賃金労働者に失墜するか，いつの間にか町に追いやられた．より順応性があると，企業的農場経営者となった．貨幣地代を支払い，賃金労働者を用い，生産物のほとんどを販売した[21]．」

16 世紀から 17 世紀にかけて，価格革命が起こった．貴金属が新たに供給されたことで，営利事業は活発になった．イギリスは，植民地化活動を開始し，商船を開発し，18 世紀には主要な商業列強となった[22]．

ミッチェルは，商業は拡大し，金融組織は一層精巧になっていったという．利子を付けての貸し付けは，資本投資の便益が明らかになったことによって合法的な意識的習慣となった．まもなく，イギリスでは銀行業が始まった．金細工商ゴールドスミスの金匠手形は，裕福な人々の間では周知の流通通貨となった．ロンドンでは，イングランド銀行が 1694 年に設立される数十年前に，預金・貸し出し・発券銀行が栄えていた[23]．

企業取引の規模が増大し複雑性が増すにつれて，より正確に帳簿をつける必要性が生じた．イギリスでは商業階級が，1494 年にイタリア人が生み出した複式簿記を 16 世紀に習得し始めていたとみている．

商業は，こうしてイギリスを含め世界に広まった．週市，日々の市場，小売店が普及した．1700 年までには，ロンドンを含め他の市にも企業を行う様々な店舗が存在し，多くの顧客を引き付けた．

ミッチェルの分析では，16 世紀から 17 世紀にかけては貿易，鉱業や植民地計画が，17 世紀から 18 世紀にかけては製造業，銀行業，保険業が営利企業の得意分野となった．市場が拡大し，これに伴う大量生産や製品の規格化と共に産業の資本主義的組織が勃興し，賃金労働者数は増加した．

企業の事業が増大するにつれて，ミッチェルの見解に従えば，16 世紀後半イギリスでは，株式形態の組織が支配的組織となり始めていた．イングランド銀行は株式形態を銀行業に合わせて変えた．そして株式会社組織は，1862 年に議会が株主の有限責任原理を認めてから急速に拡大した[24]．

また，投資市場は資本の増大と共に進化した．1773 年には，ロンドンの株式仲買人が証券取引所を組織した．ナポレオン戦争と共に生じた投資や有価証券の投機取引における顕著な増加，株式会社の普及，鉄道建設に対処することができる金融機構をもつに至ったと述べ[25]，さらに次の見解を披瀝する．

「ヨーロッパの開拓移民は，アメリカに来たとき，17 世紀の様々な本国の貨幣慣行を持ち込んだ．しかし辺境生活の苦しい状況下で，植民地開拓者はより簡便な様式の組織への一時的な後退を経験した．……生活の主たる務めは衣食を十分に獲得し，家を建て土地を開拓し，インディアンを近づけさせないことであった[26]．」

ミッチェルのみるところでは，この後退は大西洋の沿岸地方では比較的短期間であったものの，西部開拓時代の辺境では相変わらず苦しい生活の特徴を示していた．そのため「毛皮商，罠猟師，初期の開拓移民は，自らの消費するもののほとんどを得たり作ったりしなければならないのが常であった[27]」という．合衆国は，19 世紀後半になってようやく母国に並ぶことができた．「合衆国の外国金融関係はイギリスほど完全でもなければ，外国貿易技術もイギリスほど勝ってもいない．他

20) *Ibid.*, p. 69.
21) *Ibid.*, p. 70.
22) *Ibid.*, p. 70.
23) *Ibid.*, pp. 70-71.
24) *Ibid.*, p. 72.
25) *Ibid.*, p. 73.
26) *Ibid.*, p. 73.
27) *Ibid.*, p. 73.

方，小売業全体はイギリスより高度に組織化されているし，合衆国の事業法人はおそらく法人規模ばかりでなく系統的組織化の点でもイギリスより優れているだろう[28]．」

こうしてミッチェルは，これまで略述してきたことについて，「われわれにとって極めて当然にみえる金銭上の意識的習慣の複合体が，いかに『恐ろしい力によって驚くべきものに作り上げられている』か示している[29]」と述べている．

具体的には，封建税を金納に振り替え，それに伴って労働・商品地代も貨幣に振り替えるようになった．同業組合が生産物の交換と共に発達し，小売店の成長もみられ，交易の中心地としての町が台頭してくると，銀行業や商法が考案されるようになった．また株式会社が組織されたことによって，営利企業のほとんどの領域で支配的立場が高まった．経済的投機事業を管理する技法としては，会計学が採用された．特別な組織は，投資・投機に備えるために進化し，人々の生活も全人口が賃金・利潤・投資収益を組み合わせた所得に依存する形へと変化した．勇敢な人や高貴な生まれの人に与えられていた権力は，巨万の富や秀でた企業能力を有している人に移動した．ミッチェルはこのような実態を提示し，最後には「……これらの新しい情勢は，全て結合して現在の様式の企業経済を生み出した．この現段階が，最終的な様式であると想定することはできない．それどころか，金銭制度は，その長い歴史のいずれの時期においてもそうであったように，現在も急速に変化しているのだろう[30]」と結んでいる．

Ⅳ　ミッチェルの所説の検討

ミッチェルは，貨幣の役割について明確にするために，貨幣様式が人々の生活や習慣にどのように関わってきたのか，その過程全体の解明に取り組んだ．

彼の分析では，まず貨幣が取引に導入されたことにより，経済的自由が拡大した．同時に，経済的美徳の習得を余儀なくされるという側面もあった．また，貨幣経済のもつ恩恵を安定的に継続して享受することには困難を伴うが，財を作るという課業によって指導的地位に就くこともできるようになったとみている．

そして貨幣の使用が増加し，貨幣経済が発達するにつれて様々な問題が生じたため，国家も対策を考えなければならなかったという．なかでも貨幣体制の設計方法を喫緊の技術的課題として指摘した．

貨幣経済の生産は，所得分配の不平等を招きつつも合理的になったこと，加えて企業循環との関連についても言及している．

こうして，経済行動は合理的であると捉えていたため，仮定から導かれた思弁に頼る経済理論では，現実の人間行動を説明することはできないとみているのである．その結果，データの蒐集によって説明仮説を検証する経験科学は，経済学を科学的にすると考えるに至った．

またミッチェルは，当然視されている制度の複雑性を明確にすべく，貨幣の使用が成長してきた段階を詳細に検証した．それによると，貨幣の使用に至る前の贈与物交換に始まり，有史時代を経て急速な発展期を迎え，ローマでさらに拡大していったという．その後，金銭組織はローマ文化の崩壊によって衰退したが，次の段階では封建制度にも変化がみられ，税の金納が許可されたり，町が内外貿易の中心地になったりして勢いを盛り返した．続いて起こった価格革命や資本主義的組織は，イギリスに商業や株式会社の拡大をもたらした．

ミッチェルは，そうしたヨーロッパの貨幣慣行が合衆国に伝えられたものの，十分に機能させることは困難であったと捉えている．しかし19世紀後半になって，小売業・事業法人ではイギリス

28)　*Ibid.*, pp. 73-74.
29)　*Ibid.*, p. 74.
30)　*Ibid.*, p. 74.

を凌駕するまでに成長したという．ゆえに，金銭上の意識的習慣の複合体に及ぼしている力の恐ろしさを示唆するに至ったのである．

ミッチェルは，こうして広範にわたる説明変数に言及した．これらの様々な要因が累積的に作用し，複合的結果を生み出すと考えたからである．それゆえ変化に対し，経済体制が制度的にどのように反応するかを検証するために，効率向上や経済的利害の見地から金納と市場の導入・拡張に注目し，貨幣経済の長期的変化過程を論じた．換言すれば，貨幣の使用が増大し市場が成長したことによって，封建制度の先入観に破滅的な影響をもたらし，金銭的な思考習慣を発展させることになった点を描き切ったといえよう．

如上の諸点を踏まえると，ミッチェルの論文「経済史における貨幣の役割」でみてきたように，行動は制度によって規定されるものである．にもかかわらず正統派経済理論の類型は，人間がある特定の制度の論理に完全に支配されると思い込んでいるとミッチェルは指摘した．ベン・セリグマン（Ben Seligman）が「……古典派体系は，一種の金銭論理となった．人間行動の解釈に見せかけているからである．その結果，貨幣は欲望を規格化し，人間の世界観に影響を与えるものだということを理解できなかった[31]」と述べるのもけだし当然のことといえる．

いずれにせよ正統派の経済理論は，自らが制度の論理を展開しているという点は認識していない[32]．「経済学者は，現状を説明するうえで，現代人が漸次使用することを学習してきた概念をあたかも当然のこと，つまり人間として生まれつき備わっている能力の不可欠な部分……として扱うとき[33]」深刻な誤りを犯すことになる．「合理性が特徴づける抽象的な人間性を措定する必要は論理的にはない[34]」，また「合理性の土台を見いだすのに，……個体の内部で経験全体から感情要素を抽出し，それが快楽的性質を帯びているのか，苦痛的性質を帯びているのかを判断し，その大きさを比較する能力に目を向けてはならない[35]．」

ミッチェルによれば，正統派経済学は人間性における合理的要素を強調しすぎ[36]，個人の理解力・分析力を過大評価している．また，個人は社会的・制度的状況に対して外生的であるとする見地から理論を構築している．しかしながら習慣を合理化するのは，経済制度のなかでもとりわけ貨幣制度である．「貨幣の使用は，経済生活それ自体を合理化するので，経済生活の合理的な理論を立てるための基礎を築く．貨幣は，諸悪の根源ではないかもしれないが，経済科学の根源ではある[37]．」

アラン・G・グルーチー（Allan G. Gruchy）も主張するように，「経済生活を合理的にするものは，人間の心が有する一定の計算能力ではなく，貨幣の使用をめぐって作り上げられている制度の複合体全体である．経済主体として人間は，合理的になることを選択しない．そうせずとも毎日の決まった仕事のなかで，貨幣の使用に由来する行動習慣によって合理的活動方向をたどらされる[38]．」このように合理性は後天的習性であるがゆえに，足掛かりとする理論を見誤れば，精巧な理論的構築物は容易に組み立てられても，それでは事実を適切に解釈することはできない．いかな

31) Ben Seligman, *Main Currents in Modern Economics*（New Brunswick: Transaction Publishers, 1990）, p. 192.

32) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism,* Vol. II（New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969）, pp. 789-790.

33) Wesley C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part II," *Journal of Political Economy,* Vol. 18, No. 3, March, 1910, p. 204.

34) *Ibid.,* p. 216.

35) Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays*（New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950）, p. 170.

36) *Ibid.,* pp. 103-111.

37) *Ibid.,* p. 171.

38) Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought: The American Contribution*（New York: Augustus M. Kelley・Publishers, 1967）, pp. 279-280.

る合理性を人間が有しているかは，社会習慣である制度に総括されるべきなのに，正統派理論は，制度ならびに制度が経済行動・効果に及ぼす影響について首尾一貫した理論を立てられなかった．

グルーチーは，傾聴に値する見解を披瀝する．

「……制度上の圧力が働いており，可塑的な人間性を，高度に合理的な行為の厳格な型に押し込もうとしている．わずか数世紀の間に，人類は商業・産業資本主義という拘束服を着させられ，会計室の規準を誇大に考慮するよう教え込まれてきた．中世末に商業資本主義が発展してから，特別な経済制度が出現し，近代文明の多くに形をつけ潤色してきた．これが重要な合理的習慣である．周知の貨幣制度である．この習慣は，何よりも近代資本主義の色調あるいは精神を決定してきた．金を儲け支出する過程には，それ自身の特異な論理がある．この論理の助けにより，人間は，『様々な量の異なる財が，相対的にどれほど重要であるか』比較検討するし，価値を評価する見地から利害を考慮する．結果として，今日の生活は規格化し合理化している．これは，人間の心に存在する固有の合理性の原理の必要条件に基づいているものでもなければ，絶対理性の漠然とした規準あるいは物質界外の規準に基づいているものでもない……．生活が規格化し合理化しているのは，先進資本主義社会における貨幣の使用の必要条件に基づいている．経済界の隅から隅まで，会計体制は成長している．そして，その影響力が浸透しているところはどこでも，人間は，人間行為の高度に商業化された規準に照らして，生計を立てる様式を調整する必要がある[39]．」

これまで経済学者は，経済生活のもつ意義を軽視してきた．人間行動は金銭的環境が生み出すにもかかわらず，高度に発達した貨幣経済において人間行動を説明した．正統派の経済的合理性は，金銭的規準・制度に慣れさせることから生ずる．また，それは歴史・文化・制度に特有の現象であり，経済学は行動の科学として，貨幣の使用に多大な注意を払った．貨幣経済は，「わが国の文化全体のなかで，実のところ最も強い影響力のある制度のひとつ[40]」ということになる．金銭的概念は，人間に経済生活を合理化するように教え込む．その結果，貨幣の使用は経済生活の合理的理論を立てるための基礎を築いた．

セリグマンは正統派経済思想の本質を看破し，「貨幣が人間行動にいかに強い影響を及ぼすか忘れられていた．快楽主義は，ミッチェルの主張によれば，一種の金銭論理を表面上反映しているものの，基本的な問題に取り組むに至っていなかった．快楽主義は，貨幣体制の論理を全く見抜けなかったからであった[41]」と述べる．

これまでみてきたようにミッチェルは，高度に組織化された貨幣制度が，文化的にいかなる意義を有しているか考察し，現代文明において貨幣が演ずる役割を説き明かした．貨幣経済がどのように進化するか，その全体像を明らかにすべく，貨幣経済として知られている制度の支配的複合体の考察を枢軸に経済研究の統合を試みた．経済活動において貨幣が演ずる役割に関する知見を得ると，貨幣制度を志向する経済学は，まさにその進歩に資するからである．「近頃，経済理論には様々な傾向があるが，なかでも経済を分析するうえで，貨幣の使用を中心的特徴にする傾向ほど，私にとって期待できるように思えるものは他にない[42]」と主張するゆえんである．この観点からミッチェルは，貨幣様式が人間関係に浸透してきた過程や習慣に及ぼす影響を検証した．

39) *Ibid.,* pp. 258-259.

40) W. C. Mitchell, *op. cit.,* p. 371.

41) B. Seligman, *op. cit.,* p. 183.

42) W. C. Mitchell, *op. cit.,* p. 149.